

子育て広場

小松 歩・佐久間 路子・森山 千賀子・井原 哲人・仲本 美央・庭野 晃子・村上 博文・瀧口 優*・佐々加代子**

活動実績の概要

1. 取り組みの経過

新型コロナウイルスの扱いが変わったことにより、活動制限が緩和され、「地域子育て支援演習」を軸とした「あそぼうかい&世代間交流」を中心に学外での活動にも参加するなど、子育て広場の活動は全体的に昨年度よりも活発に行われた。

「地域子育て支援演習」に関しては、2部形式でそれぞれ参加者上限を設け、感染対策を徹底して行い対面で実施した。5月のテーマは「遊びつくそうこどもの日～レトロ商店街へようこそ～」とし、従来はJ棟文化創造ホールとJ14講義室の2カ所で実施していたが、5月はI13講義室と講堂を加えて4カ所に各コーナーを分散させ、参加者が密にならないようにした。上限人数は60名(計120名)としたが、当日参加者は合計92名で、各会場に分散するとほどよい人数で、子どもたちや保護者と一緒に楽しむことができた。

7月のテーマは「さぁ行こう夏の探検隊!」とした。感染対策として、2部制(各回60名定員)、4カ所での実施は継続し、熱中症対策として体育館の代わりにI24講義室を使つての広場となった(子ども64名、保護者56名)。

11月は「秋の収穫祭～秋のものを集めよう～」として同じく対面で実施した。感染状況も落ち着いていたことから上限人数を80名としたが、定員には満たなかったものの、ゆったりと関わることができた広場となった。なお、今回は朝鮮大学の学生も準備から参加しての実施となった(子ども41名、保護者42名)。

12月には、「進み続ける白梅子育て広場～地域

に必要とされる居場所を目指して～」をテーマにシンポジウムを開催した。1年間の活動の総括後、第二部ではグループディスカッションを実施した。武蔵野美術大学生や地域住民の参加もあり、子育て広場の今後の可能性を考えるよい機会となった。

GP学生委員会の活動としては、オープンキャンパス時に活動説明をする他、8月には高校生も参加する形で「あおぞらひろば」を実施した(子ども25名、保護者23名)。また学外での活動も再開され、ルネこだいら夏休みフェスタ(8月20、21日)での出張あそぼうかい実施「夏の冒険～あつい夏を吹きとばせ」(子ども91名、保護者74名)、さらに新たに小平市役所での産業祭から出張あそぼうかい開催の要請があり、11月12、13日に参加した「身近なあれがスタンプに!?世界に一つだけの万華鏡を作ろう」(子ども178名、保護者94名)。

2. 成果と課題

教員は、4月から分担して「地域子育て支援演習」の授業を実施しながら学生たちの準備を支援した。熱中症対策など、教員としてアドバイスや道具の準備なども行うとともに、資料作りの支援、チラシやニュースの印刷なども教員が分担して取り組んだ。

昨年末から対面での広場が再開したこともあり、2年生の中には昨年度活動に物足りなさを感じている者もあり、今年度も学生委員として自ら学びながら積極的に活動に参加する姿があった。また3、4年生やOBの支援も毎回あり、広場開催で必要な事柄を1、2年生に対して補うことができた。リハーサルや前日準備には必ず複数のOBが参加し、指導や支援をしており、上級生と

* 客員研究員 白梅学園短期大学名誉教授

** 客員研究員 白梅学園大学名誉教授

学び合う関係性は続いている。さらに、コロナ禍でオンライン開催した経験を活かし、当日直接参加が難しい高齢者施設に学生が出向いて Zoom で広場会場とつなぎ、会場の雰囲気を感じてもらいながら施設で直接かかわりを持つ等工夫を行った。こうした新たな試みも成果と言える。

また GP 学生委員の上級生は、地域からの要請に応える活動が再開したことで、地域他団体との関係が深まり、自分たちの活動と地域ニーズとの関係を改めて考えるきっかけとなった。12月に開催された白梅子育て広場シンポジウムでは、「今後の課題」として①学生の思いと地域ニーズが合致しているという強みを活かした居場所、②誰でも楽しむことができ、少しでも多くの方々に満足してもらえる居場所づくりを挙げている。学生の課題意識としてはとても意味あることと言える。一方で、地域からの期待やニーズが増えてくると、活動の機会や場所が広がることが予想される。教員集団としては、今後も学生たちの成長を保証すべく協力すると同時に、それらに応えることが学生の学びにつながるように、学生とともに検討し整理することも必要となろう。